そのココロは、

円

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
そのココロは、

【Ｎコード】
Ｎ１８９１Ｔ

【作者名】
円

【あらすじ】
目が合って、恋に落ちた。相手も同時に落ちていた。それだけの事。それだけの事が、周りにとってはものすごく大きな問題だったらしい。
本人達はラブラブなのに、周りには一切伝わらない…そんな感じの物語です。

1

ぴたり。
こちらを見たまま、魔王が動きを止めた。
不自然に傾いた杯から、透明な雫がほろほろと零れ落ちて袖を濡らしている。
あれが葡萄酒の様な色の強いものだったら、染みになって大変だったろうなと思ったが、
すぐに、もともと服が黒いから、そんなに目立たないかと思い直した。
すくっ。
魔王が唐突に立ち上がった。突然の行動に、周りがざわつく。
つかつかつかつか。
魔王は訝しげな周囲の視線を完全に無視し、真っ直ぐ此方に向かって歩いてきた。
ぴたり。
私の目の前で足を止め、じっと私を見据えたまま再び静止する魔王。
周りには困惑の声が飛び交っている。
がばり。
急に視界が黒く染まり、体が引っ張られる感覚がした後、お腹に強い圧迫感。
一瞬後、どうやら肩に担がれている状態だという事に気づく。
魔王の行動に、全員ぽかーんとしている。
ぽかーんとしているうちに、魔王は私を担いだまま席へと戻った。
無造作に腰を下ろし、ぽすりと私を膝に乗せる。
そのまま、何事も無かったかのように平然としている魔王。
されるがまま魔王の膝の上にいる私。
抵抗することもできたが、大人しく膝の上に納まっているのは、まぁ、そういう事だ。察してくれ。

さて、しかし、この状況はまずい。なにがまずいって、私、側室なんだよね。
まぁ、厳密に言うと、少々普通の側室とは違っていたりするんだけれど、今は置いておくとして。
この場に居る二人の王のうち、魔王じゃ無い方の王の側室なわけだ。
しかも、その王っていうのは元勇者で、元勇者ってことは元魔王の敵で、
まぁ、なんやかんやあって和解したから今は敵ではなくなったのだけれど…
現在行われているのは、魔界と人間界の言ってみれば盛大な親睦会で、
正式名称は、なんだっけ、平和となんたらのなんたらな式典（うろ覚えの極み）まぁとにかく、
これから仲良くしてこうねーって確認しあうのが目的の場なのだ。
んで、それをふまえて、魔王の膝の上に王（元勇者）の側室。うん。
大問題です。
もう、私の手には負えない感じなのですが、ちゃんと収拾つけていただけるんですよね？…ね？
という意味を込めて魔王を見上げると、魔王は何か思案するように無言で私を見下ろし、
こくり。と頷いて、
「食うか？」
小さく切られた梨を差し出してきた。無言の問いかけは、どうやら通じなかったようだ。
せっかくなので梨は頂いておく。
しゃくり。うむ。美味。
梨を食べる私を、どことなく満足そうに見下ろしている魔王。
なんだろう、ちょっと楽しくなってきた。
だが、この状況を楽しむ余裕があるのは私だけだった様で、
他の人は全員、驚きの表情のまま固まっていた。目がまん丸だ。

王（元勇者）なんて口まであんぐりと開いて…ちょっと恥ずかしいから早く表情を繕って欲しい。
フロアも大惨事だ。剣舞の途中でこんな事になってしまった為に、舞手が華麗に受け止めるはずだった剣が全部床に刺さってしまっている。
…怪我人が出てないと良いが。
梨を咀嚼しつつ、周りの状態を見渡していると、
焦った表情でこちらに向かってくる魔族の男性が目に入った。
装いを見るに、わりと偉い立場の人なのだろう。
「我が主よ、勝手な行動は慎んで下さいませ。周囲が混乱しております！」
早口にそう言って、男性はまだフリーズしたままの人々を気遣わしげに見回した。
うん、何だか良い人そうだ。
「問題ない。」
それに対する魔王の返答は一言だった。男性は眉間にしわを寄せた。
「問題大有りです！その方は、あの“戦姫（せんき）”様であらせられるのですよ！」
魔王を睨みつけた後、ちらりと私に視線を向ける男性。
私の事を知っているようだ。というか、その呼び名…魔族の方でも使われてるんだ…
まぁ、あの時は派手にやらかしたからなぁ。
「問題ない。」
自信満々に言い切る魔王。男性は色々と諦めたような表情になった。
この人、苦労してるんだろうな。
「…貴方様には問題ない事なのでしょうが、周囲にとっては大問題なのです。
　戦姫様も困っておいででしょう。」
とても可愛そうなものを見る様な目で見られた。いえ、あの、そこまで困って無いですよ？

「困ってない。」
私が否定する前に魔王が断言したので、開いた口をそのまま閉じた。
男性は、心底疑わしげな顔で魔王を見ている。全く信用していない目だ。
「…、それで、まさか、ずっとこのままのおつもりですか？」
男性はものすごく不機嫌な声を出した。
頼むからそれは止めてくれと思っているだろう事が伺える。
「あぁ。」
だが魔王のスルースキルは半端無い。これにも、さらりと肯定を返した。
「式典が終わるまで、でございますか？」
男性はすごく、ものすごく不満そうだ。
「いや。持って帰る。」
最初の否定の言葉でほっと息をついた男性だったが、後に続いた言葉で一気に顔が強張った。
「馬鹿なことをおっしゃらないで下さい！無理に決まっております！」
男性が発した声は、殆ど悲鳴のようだった。
「何故だ？」
魔王は不満そうにそう言って、ぎゅっと私を抱きしめた。
放す気は無さそうだ。

2（前書き）

魔族の男性視点です。

2

我が主は、何をお考えになっているのか！！
常よりその自由すぎる言動に振り回されて来ましたが、今度のコレは酷すぎです！
長年のごたごたがやっと片付き、これで平穏が手に入ると思った矢先にっ！
やらかして下さいましたなあのお方は！！
催しの途中で唐突に席を立った瞬間に嫌な予感はしていましたが、いえ、むしろ嫌な予感しかしませんでしたが、
まさか、まさか、
相手方の側室をかっさらって来るなどという暴挙に出るとは…！
しかも、しかもですよ？
主の膝にちょこんと乗せられていたのは、
あの戦姫様ではありませんか！
なーにしてくれてやがりますかオイ主コノヤロウ！！
民からの人気ダントツトップで、さらに人間達だけでなく魔族内での好感度も高い、
あの戦姫様にあらせられますぞ！？
かくいう私めも、戦姫様の事は高く評価しております。
私が直接戦場に立つことはありませんでしたが、
戦いの様子は魔物達の目を通して覗き見しておりましたので。
ひたと前を見据え、凛と佇むそのお姿、今もしっかりと私めの脳裏に焼きついております。
戦装束もぐっと来るものがありましたが、こうして華やかに着飾ったお姿もまた可憐で…
っと、話がズレてしまいましたね。
とにかく、そんな方に手を出そうものなら、再び人間達を敵にまわす事にもなりかねないのです。

それなのにあの方はしれっと！
「問題ない。」
じゃありませんよ！もはや問題しかありませんから！！
うぅ胃が…っ

3

「魔王よ、私の大切な人を返していただきたいのだが。」
いつの間にかフリーズ状態から回復した王（元勇者）が、
薄く笑みを浮かべながらこちらに歩いて来た。
何だか王が怖い。表面上は穏やかだが、内心怒り狂っている感じだ。
そりゃそうか。大切な式典で勝手な行動取られたら怒りもする。
それに、私は一応側室なわけだし、立場とか色々あるんだった。
あと単純に心配してくれているんだろうな…優しいから。
「断る。」
だが魔王、即答である。ぴきりと王の額に青筋が浮かんだ。
魔族の男性は胃の辺りを押さえた。心労で胃を傷めているのだろう
…可哀相に…
「彼女は、私の側室だ。」
すっと細められた目。ピリピリとした空気が痛い。
「関係ない。もう俺のだ。」
息苦しさを感じるほどの怒気を受けても、魔王は全く引かない。
俺のもの発言に実はちょっとキュンとしたりしているんだが、
そんな事言っている場合じゃ無いな。すまん我が王よ。
「無礼が過ぎるぞ。」
「ふん。」
一触即発の雰囲気である。
可哀相な魔族は、精神を保つための何かが切れたのだろう。死んだ
様な目になっている。
どうしよう。何だかすごくまずい事になっている。このまま二人が
衝突したら、
和睦が白紙なんて事になったりなんかしちゃったりして？
冷やりとした恐怖を感じ、慌てて二人の間に入る。や、位置的には
ずっと間に居たわけだが。

ぎゅっと、それぞれの袖口を掴み、自分のほうへ引っ張った。
「どうした？」
「ん？」
二人の視線が私に向き、その目から怒りと敵意が消えたことにほっと息をつく。
さて、このままだと事態が収まらないので、まずは膝から降ろしてしてもらわねば。
「魔王様、放していただけますか？」
がっちりと抱きしめられていては降りられない。というか、全く動けない。
「嫌だ。」
断られた。しかも、今のやり取りで再び王から怒気が漏れてきている。
あわわ、どうしよう…！頼むから放して！平和のために！
「…、分かった。」
あれ？放してくれた。必死さが伝わったのかもしれない。…ものすごく不満そうではあるが。
膝から降りて、王を見る。
「我が王、心配をお掛けして申し訳…」
「謝らないで良い。お前のせいでは無いんだからな。」
遮られた。さらに言葉の最後でちょっと魔王を睨んだ。
魔王のせいだといいたいのだね？うーん、でも私も抵抗しなかったわけだし…。
「しかし、」
「いいから。」
再び遮られた。良いですけどね。
そんな優しさ全開の笑顔を向けられつつ頭を撫でられたら、もう何も言えません。
「行こう。」
優しく促す王に従って、歩きだ…

…せなかった。えーと、ちょっと待って。
「いえ、あの、王、お待ちください。」
「うん？」
不思議そうに振り返った王の眉間に、ぐっと、深いしわが刻まれた。
「なぜ貴様も着いてくるのだ。」
「コレと離れる気は無い。」
堂々と宣言された。
当然のような顔で私の横に立っている魔王は、恐らく席まで着いてくる気なのだろう。
それだけは止めていただきたい。他の側室様がた、大混乱間違いなしだから。
だったら、もう私がこっちに居たほうが良いよね。
となると王に許可を得ないと…いけないんだけども、
どうしよう何だかとても目に見えて不機嫌です。
「そんな勝手が許されるとでも？」
こんな低くてドスのきいた声、初めて聞いたぞ。これ、説得できるかなぁ…？
「王、私、ここに居ます。魔王様の傍に。」
「な！」
絶句する王。そうとう私が魔王の傍に居るのが嫌な様だ。でも、やっぱり、
「その方が、まだ良いと思います…」
さっきは周りの混乱ぶりと側室って立場を考慮して離れた方が良いと思ったんだが、
こうなると動かない方がマシだと思うんだ。
「気を使うな。お前が我慢する事は無い。」
気は使ってるけど、我慢はしてないぞ？魔王と居るのは、その、まぁ、嫌じゃ無い。
「いえ、私は…」
ひょい。

言葉の途中ので後ろから持ち上げられた。犯人は勿論魔王である。
「話は済んだろう。」
ふふん。
魔王は勝ち誇った笑みを浮かべた。
煽らないでくれ！
王も殺気を、殺気をしまって！

4（前書き）

魔王様視点です。

4

目が合った瞬間、雷刃散華（サンダーフレイム）をくらった時の様な痺れを感じた。

――――欲しい。

思った瞬間に体は動いていた。
持って来たソレを膝に置くと、なんとも言えない満ち足りた気分になった。
何かを求めるように見上げてきたので、
これは俺からの求愛を待っているのだろうと見当をつけ、
自分の皿の餌を差し出せば、ソレは躊躇い無く口に入れた。
うむ。これで俺とコレは番（つがい）だ。
じわりと胸の内に湧き上がる、今まで感じたことの無い喜び。
番も嬉しいのだろう。どこと無く楽しげな雰囲気が伝わってきた。
これが幸せというものだろうか。俺には縁の無い物だと思っていたが…ふむ、悪くない。
俺は新しく芽生えたこの感情を、殊の外気に入った。
しかし、何故貴様等は邪魔をするのだ。
戦姫？あぁ、コレがそうだったのか。
しかし、だから何だというのだ。俺たちが番うのに何の問題もないだろうに。
側室？ふん。何をわけの分からぬ事を。コレはもう俺の番だ。
ん？何だお前まで。何故放す必要が――
――っ、分かった、分かったからそんな顔をするな。
何だ今の感じは？胸の辺りが突然収縮したぞ…？？？
む。何処へ行く気だ？何故番と離れなければならん。
というか、先ほどから俺の番に対して馴れ馴れしいぞ貴様。消されたいか？

勇者だの英雄だのともてはやされて良い気になっている様だが、
俺にかかれば貴様など一瞬で跡形も残さず消滅させ…
…ふふん、まぁ良い。
貴様がどうこう言ったところで、コレが番に選んだのは俺なのだから
な。
今の言葉を聞いただろう？コレは俺の傍に居たいと言ったんだ。さ
っさと離れろ。
俺の傍に…か。そうか。もちろんだ。
傍に居ろ。愛しい、俺の番よ。

4（後書き）

いらないかもですが、ちょっとした解説を。

☆雷刃散華（サンダーフレイム）→雷属性の、必殺技的な何か。
きっと魔王様以外がくらったら痺れる程度じゃ済みません。
その辺の魔族がくらうと瀕死、
その辺の人間がくらったら一瞬で黒こげになる感じの大技
…という脳内設定です。

5

硬直状態が続く中、
「あぁ、そうだ。はっきりさせておくが、コレはもう貴様の側室などでは無いぞ。
　コレは求愛を受け入れ、俺の番となったのだからな。」
と、魔王は軽い調子で爆弾を投下した。
「――――――!?　な、なん!?ど、ど、どぅ、どういう、こっ、だ!?」
王は動揺しすぎて口が回っていない。
恐らく『何だと!?どういうことだ!?』と言いたかったのだろう。
しかし、どういう事だと聞かれても、
「求愛…、…、…?」
されたっけか?
はて?と首を傾げていると、魔族の男性がそっと近づいてきた。
「その、戦姫様…もしや我が主から何か食べ物を受け取り、
　それを口になさったのではありませんか?」
恐る恐るといった感じに問いかけられ、
「梨をいただきましたが…」
と答えた瞬間、男性は何とも言えない悲壮な表情になった。
「食べ物を相手に与える行為が、魔族にとっての求愛にあたるのです。
　与えられた物を口にすると、了承という事に…
　戦姫様はそれを求愛だと認識していなかったのですね。」
あぁ、あれがそうだったのか。
「そう、なのか?」
魔王はショックを受けたようだ。少しよろめき、悲しそうな顔で確認してきた。
まぁ、知らなかったのは確かなので、素直に頷くと

魔王はしゅんとなった。…可愛い。
しかし魔王は強い（色々な意味で）。
すぐに、“だからどうした”的な表情を浮かべ、
「まぁ良い。番である事に変わりは無いんだからな。」
と言い切った。
「知らなかったんだから当然無効だろうが！」
動揺から立ち直った王がそう反論するが、
「あぁ、そういえば。人間は番になる為の儀式があるのだったな…
何をすれば良いのだ？
　用意するものはあるか？」
魔王はさらっとそれを無視した。
「おい！聞け！認めないからな！絶対に！」
声を荒げる王。
「邪魔をするつもりなら、消すぞ。」
壮絶な殺気を乗せて、ギラリと王を睨む魔王…
ちょっと本気で不穏な空気が流れ始めた。
ううむ。
私が魔王の番になるのは…そんなにまずいのだろうか？
やはり王としては、側室が魔王に奪われるみたいな形になって格好がつかないか。
面目を保つ為に、何かもっともらしい理由が必要なんだろうな…
…そうだなぁ、
「私が魔王様と一緒になれば、魔族と人間の絆はより深まるでしょう…
　それは、喜ばしいことではありませんか？」
というのはどうだろう。
「…っ！」
言った瞬間、王が泣きそうな顔になった。
それっぽくて綺麗な理由だと思ったんだが…はずしたか？
「…何と…健気な…」

魔族の男性も泣きそうになってるんだが、なぜだろうか。
「「「「「「戦姫様あぁあああ！！！！」」」」」」
さらになぜか、会場中からすさまじい悲鳴が上がったんだが…
うん？私はそんなに下手な事を言ったか？
いや、だが、素直に魔王を…その…好いているから一緒になりたい
…とか、
そんな…言えないじゃないか。

6（※挿絵有）（前書き）

元勇者な王様視点です。

6（※挿絵有）

その言葉を聞いた瞬間、
かつての彼女の姿がフラッシュバックした。
戦姫という呼び名の通り、常に戦いの中に身を置いていた彼女。
兵士たちの先頭に立ち剣を掲げる姿が、俺には酷く痛々しく見えた。
辛いなら逃げてしまえと言った俺に、
『正直、辛く思います。…それでも、私は…戦うと決めたのです。
　飢え、怯え、苦しんでいる人たちの為に。』
そう、真っ直ぐな瞳で言い切った彼女。
その小柄な体には大きすぎる荷を背負わされ、それでも国のため、
民のためなら、と、どんなに辛くても独り耐え続けていた…
そんな彼女だからこそ、人々の信頼と賛同を得ることができたのだろう。
だが、そんな彼女の優しさが、俺はいつも気がかりだった。
過酷な旅の途中、諦めそうになる俺の心を繋ぎ止めていたのは、
早く戦いを終わらせ、彼女を過酷な使命から解き放ちたいという思い。
それぞれの役目を果たすため、行動を別にする事が多かったが、
できるなら常に傍に居て、彼女が傷つかぬよう守りたかった。
離れている時間が多い分、傍に居る時は自分でもやりすぎかと苦笑する程に構いたおした。
女として見ていたわけではない。彼女に抱いていたのは、そういう激しい感情ではなく、
もっと、家族や友人、親しいものに向けるような穏やかな想いだ。
全てが片付き、城から去ろうとしていた彼女を引き止め、側室にしたのは、
王となった俺なら、彼女に安らげる場所を与えられると…そう思ったからだった。

だというのに！
彼女は、この国の為に、また犠牲になろうとしている！
彼女が魔王の伴侶になる事を拒めば、魔界との関係はきっと悪くなるだろう。
再び戦争などという事にはならないだろうが、それでも、
魔族との不和は、民達の心に不安を植えつけるのには十分だ。
そうなれば、やっと手に入れた平穏に傷をつける事になる…彼女が何より望んだ平穏に。
選択肢など、はじめから一つしか無い。
そんな事は私だって理解している。だが、だが納得などできるものか！
なぜ、”生贄“に選ばれるのは何時も彼女なのだ…！
それが運命だとでもいうのか！！
＞ｉ２４５４１―３２３１＜

7

シャラリ、シャラリ。
髪に挿した飾りが揺れ、涼やかな音が響く。婚儀の為の華やかな衣装を纏い、
大勢の人々に見守られながら、私はゆっくりと歩みを進めた。
愛しい人と…誓いを交わす為に。
「「戦姫様…っ、…うぅっ…」」
…。
「「うあぁあー戦姫様ぁあ！行かないで下さいぃいい！！」」
…。
婚礼の儀って、もっとこう、わーっと歓声とか上がる感じでは無かっただろうか。
目が合えば啜り泣かれ、微笑みかければ号泣され…
こんなにも悲しみに染まった婚儀は歴史上初だろう。
…相手が魔王だからだろうか？
誤解だったとはいえ、人々に植え付けられた魔物や魔族に対する恐怖は根深い。
その親玉である魔王に恐怖を覚えるのはあたりまえだ。
その上、今の魔王はいつにも増して魔王らしい装いをしている。
魔界式の正装は、何というか、だいぶ攻撃的なブツなのだ。
全身黒で統一された衣装に、棘や角を模した装飾…。
動くたびにバサッと音を立てて広がるマントがまた、ソレらしい。
これぞ魔王といったその姿は、確かに人々の恐怖を煽るかもしれない。
そう思えば、この反応も頷ける。うん、だがしかし。
「「「……戦姫様…」」」
何故魔界側の方々まで、しんみりとした感じのテンションなんだ？
目が合えば沈痛な面持ちで俯かれ、

微笑みかければ、見ていられないとばかりにサッと目を逸らされる…
何だろう、私、すごく可哀想な人扱いをされている気がするんだが。
なんとも言えない気分になりつつ、私は誓いの石を目指した。
魔王はすでに石の前に立っており、私の到着を待っている。
目が合えば、早く来いと急かす様に手を差し出す魔王。
足を少しだけ速めながら、私もまた手を伸ばした。互いの指が触れる…と思ったその時、
「待てっ！！」
声と共に、完全武装した王が目の前に降ってきた。
「「「「「「「おおぉおぉっ！！！！」」」」」」」
人々から、待ってました的な雰囲気の歓声が上がる。
「彼女は、渡さない！！」
剣を魔王に突きつけながら、息巻く王。
「貴様…本気で死にたい様だな？良いだろう。ひねりつぶしてやる…虫けらめが！」
全身に黒い瘴気を纏い、悪役の見本の様な台詞を素で発する魔王。
まるで物語のワンシーンの様だ…とか思っている場合じゃなかった。
王！心配してくれてるのは分かるけど、ちょっと空気読もうか！
魔王も聞き流して！その人ちょっと過保護が過ぎてるだけだから！
というか、こんな所で戦われたら大惨事ぃ！！
「お止め下さい！！」
二人の間に割り込み、両手を広げてそれぞれを隔てた。
「止めないでくれ。お前を犠牲にしてまで得る平穏になど…何の価値も無い！」
…、…は？えーと、何か誤解されてる？
「王、私は犠牲になるつもりなど…」
「良いんだ。…分かっているから。」
ふっ、とどこか苦しげな笑みを浮かべる王。…いや分かってないだろう！！
駄目だ。この人はこうなると生半可な言葉じゃ説得できないんだ…

もうハッキリ言うしか無いのだろうか。魔王を…愛してる、とか…。
いや、しかし…やはり気恥ずかしい――
「心配するな。すぐ、終わらせる。」
――とか言ってる余裕はなさそうだ。殺る気満々ですね魔王様！
その手に持った”闇を圧縮して具現化しました”みたいな球体から、この国の半分程なら軽く平地に出来るレベルの凄まじい魔力を感じるのは…
気のせいであって欲しい。
「止めて下さい！私は本心から、魔王様と一緒になりたいのです！私は…私、は、」
うぅ…恥ずかしい！しかし、言わなければ。
「魔王様の事…を…、ぁ、」
くじけそうだ！何この羞恥プレイ！！くそぅ負けるな自分っ！
「愛して…る、のです！」
言ったー！！最後の方恥ずかしすぎてちょっと涙目になったけど言い切った！
で、言い終わると同時にがばっと魔王に抱きしめられた。
「ふ、ふふふ、ふはははは！聞いただろう！貴様が何を言おうが、無駄な事！
　コレは自ら俺を選んだのだからな！！」
魔王は笑いながら、ふわりと体を浮かせた。抱き締められたまま私も一緒に浮き上がる。
頭上には、いつの間にか転移用の魔方陣が出現していた。
「な！待て！！」
「断る。もう邪魔をされるのは面倒だ。」
魔王は王を一瞥すらせず、魔方陣を発動させた。ぱぁっと視界が白く染まり、
「「「あぁそんな！戦姫様――！！」」」
「「「えぇっ！？ちょ、待っ、魔王様ぁああ！？」」」
二通りの悲鳴が、すぅっと遠ざかっていった。

8（前書き）

当時を知る、どこかの誰かの「話し」です。

8

――――え？戦姫様を知らないのですか？本当に？
そうですか…それは珍しい。…そうですか……
あの、良ければ少しだけ、話をさせて下さいませんか？
聞き流していただいて結構ですから。
私はただ、貴方に向かって語る事で、思い出に浸りたいだけなので。
いえ、まぁ、色々とありまして、ね…。
それでは。

前の王の時代、人間界と魔界の関係は、酷く悪いものでした。
魔物や魔族が気まぐれに現れては人間達に襲い掛かり、
村を焼き、街中を破壊し、残虐非道の限りを尽くしていたからです。
度重なる襲撃に人々は怯え、恐怖が精神を蝕んでいきました。
畑が荒らされ、家畜が殺され、人々は飢えにも苦しんでいました。
それはそれは、酷いものでしたよ、あの頃は…本当に。
王は、魔物・魔族の討伐を命じ、各地に何度も兵を派遣しましたが
被害が収まることは無く、
国と民を守るためにと、王は魔界への進軍を決定しました。
兵士たちを率いるのは、王の一人娘。王族の役目は民を守ることで
あると、
周りの制止を振り切ってまで剣を持つことを選んだ、凛々しく気高
い姫君です。
人々は、戦場へ向かう彼女を“戦姫”と呼び、讃えました。
…しかし人間と魔族の力の差は大きく、正面からぶつかったのでは
勝ち目はありません…
そこで王は、彼女の率いる王国軍とは別に、とある腕利きの剣士に、
秘密裏に魔王の討伐を命じました。
彼は、陰ながら戦姫様を助け、道すがら魔物が出現すれば速やかに

それを排除し、
通りがけに困っている者が居れば、使命とは関係無い事であっても、
その憂いを取り除こうと尽力する…
そんな方でした。
優しく勇ましい彼を人々は“勇者”と呼び、密かに声援を送りました。
勇者様は、無意識に人を惹きつける才能をもっていらっしゃいまして、
はじめは一人だった旅に、もう一人、また一人と仲間が加わって行き、
それが全て女性であった為、なんとも羨ま…いえ、華やかな一行となりました。
使命感を胸に突き進んでいた彼らでしたが、ある時、思いもかけない事実が発覚します。
何と、今までの魔物や魔族の襲撃は、全て王が裏で仕組んでいた事だというのです！
わざと魔物たちを嗾けて旅人や商人を襲わせ、
村を襲い金品を強奪した上で火を放ち、それを魔族の仕業だと嘯き、
さらに！
魔界への進軍も、魔物や魔族の亡骸から純度の高い宝石が出てくる事に気付いた王が、
それを目当てに画策した物でした…！
真実を知った戦姫様と勇者様は、悲しみと怒りを覚え、
欲に狂った王を止めるため、そして無意味な戦いを止めるために手を尽くしました。
戦姫様は表向き王の命の通り進軍しながら、人々へ密かに王の非道な行いを訴え、
協力者を少しずつ確実に増やしていきました。
勇者様は、出会った魔物や魔族に対し、今までの人間側の勝手な振る舞いを謝罪し、

討伐の為ではなく、戦いを止めたいと訴えるために魔王の元を目指しました。
そんな英雄達の活躍により、魔界と人間界の全面戦争は回避され、
諸悪の根源である王とその賛同者達は断罪され、
人々はついに平和な日々を手にする事ができたのです！
新しい王には、人々の強い希望により、勇者様が就任する事となりました。
そして戦姫様は、王となった勇者様の側に…誰もがそう思っていました。
しかし、戦姫様は、首を横に振ったのです。自分には、その資格が無いと。
自分は、本当の姫では無いのだから、と。
そう、彼女は前王の一人娘ではなく、その影武者として送り出された平民の娘だったのです。
その事実を人々は嘆き、悲しみました。
彼女が自分を姫と偽っていた事に対して…ではなく、
姫の身代わりとして前王に無理やり戦場へ放り込まれた不憫さと、
彼女が本当の姫であれば良かったのにという落胆から、です。
新王の正式な就任を待ち城を去ると言う戦姫様を、皆が引きとめました。
より強く彼女を説得したのは、やはり勇者様でした。
勇者様は彼女が偽の姫である事を知っていました。信頼できる仲間には嘘をつきたくないと、
戦いの合間に戦姫様自身が真実を告白していたのでした。
知らされていなかった者達も変わらず彼女を戦姫様と呼び称え、
態度を変える事はありませんでした。戦姫様と長く関わった者や、
勘が鋭い者など、
薄々感づいていた者はやはりと納得しただけでしたし、気付いていなかった者も、
我等が信頼し尊敬するのは姫という肩書きではなく、彼女自身であ

ると言い切りました。
そうして皆に望まれ、戦姫様は新王の側室として迎えられたのです…

…うぅっ…
あぁ、すみません。
ここで終わっていれば、ハッピーエンドだったのにと思うと、どうしても涙が堪えきれず…
ええ、この話にはまだ続きがあるのです！
少し前に開かれた式典は知っていますか？そう、あのいやに長い名前の式典です。
そこで…、え？あ、あぁ、もう帰る時間なのですか…そうですか…
いえいえ、そんな。長々と話を聞いてくださってありがとうございました！
では、お気をつけて。

9

ふわふわと浮き沈みを繰り返していた意識が、ふっと持ち上げられるように覚醒した。

こつ、こつ、こつ、こつ……

目を開けると、腕を組みながら淡々と部屋の中を歩き回っている魔王が見えた。

寝かされていた場所から身を起こしながら、苛立たしげな表情で行ったり来たりしている魔王をぼんやりと眺めていると、

「！　起きたか。」

私の視線に気付いた魔王が、ぐるんと進んでいた方向を変え、此方に身を屈めながら両手を伸ばし……ぴたっ。と、不自然にその手を止めた。

動きを止めたまま、難しそうな顔で数秒考え込んだ後、いやにそぉーっとした動作で、やんわりと抱き上げられた。

妙に慎重というか、全体的にどこか緊張した様子に、首を傾げる。

今までが雑……とまでは行かないまでも、わりと遠慮の無い扱い方だったせいか、そう丁寧にされると何か落ち着かないんだが。

「寝たまま、もう目を覚まさないのではないかと……。転移が負担になるとは知らなかった。

人間が壊れやすい事を、忘れていたのだ。」

言いながら、泣きそうに顔を歪める魔王。

あぁ、寝てたんじゃなく、転移の影響で気を失ってたのか。そういえば転移したのはあれが初めてだった。

体験して知ったんだけど、転移って高純度の魔力の中を潜りぬける様なものなんだね。

もともと魔力の含有量が多い魔族なら平気だけど、人間みたく体内の魔力量が少ない生き物には負担が大きいって事か。成る程、勉強になった。

それで魔王はこんな感じなのか。気を失った私の貧弱さに驚いて、どうも恐々とした感じの接し方になってるんだな。
確かに魔族に比べたら人間なんて柔なものだけど、そこまで簡単には壊れないんだけどなぁ。
だから、そんな恐る恐るじゃなくもっと、
「もっと、しっかり抱きしめて下さ……」
「……っ！」
言い切る前に、ぐっと魔王の腕に力が篭り、ぎゅぅうっと痛いくらいに抱きしめられた。
鎖骨の辺りにぐりぐりと頭を擦り付け、すんすんと耳の辺りを嗅いだ後、ほぅっと息を吐きながら少しだけ身を離し、満足げな笑顔を見せる魔王。
――ズキュン！　私は思わず俯いた。至近距離でそれは卑怯だと思う。
「どうした？」
微かに笑いを含んだ声に、何となく顔を上げられないでいると、
「俺を、見ろ。」
するりと魔王の指が頬をすべり、顎の下へ……
くっと顎を持ち上げられ、どこか熱を帯びた魔王の瞳が、私を映した。
ゆっくりと、近づく距離。
私はそっと目を閉じ――
……。
――閉じた目を開き、さっと身を引いた。
構わず再び顔を近づけてくる魔王の胸に手をつき、ぐっと腕を伸ばして距離を保つ。
「何故だ。」
むっと眉間に皺を寄せ、心底不満そうに唸る魔王。いや、だって……気付いてますよね？
私の耳に届く程の音が、魔王の耳に入らない筈が無いんだから。

だだだだだだだだ！　と、重なり合った幾つもの足音が、すごい速さで近づいて来ているのだ。
ちっ、と魔王が舌打ちをしたのと同時に、
「「魔王様っ！」」
バァン！　と派手な音を響かせ、扉を吹き飛ばしながら何人もの魔族が駆け込んで来た。
「「お願い申し上げます！　戦姫様を……」」
「跪け。」
べしゃっ！　魔王の一言で、その場にいた魔族は残らず床に頭をめり込ませた。魔王、強い。

１０（前書き）

魔族視点……

床に頭をめり込ませられた手下の一人です。

10

……不憫な。

我はあの魔王様に見初められ、無理やり番にされた戦姫が可哀想でならない。

思えば、あの戦姫と呼ばれる娘は、常に不憫な役目を負わされているのだな……

はじめて戦姫と顔を合わせた時のことは、よく覚えている。

魔界と人間界の境界、それぞれ兵士と魔物を背に従え、我と戦姫は対峙した。

そうとうの恐怖だったろうに、あの娘は、全身を震わせ、目に涙を溜めながらも、すっと背筋を伸ばし、我を睨んできたのだ。

その目を見たときは、敵ながら思わず……あぁ、いや。そうだな、戦姫を側にと望み、欲っする気持ちは理解できる。

もしもあれが我の番となったなら、その心が憂う事の無いよう、慈しみ、優しく愛で……失礼、少々思考が飛びかけた。

たとえ種族が違えど、あの娘なら良い番となるであろうと言うことだ。それだけだ。

だが、その相手が魔王様となると、もはや不幸な未来しか見えてこないのだ。

魔王様と言えば、その振る舞いはまさに自由奔放。己の気の向くまま行動し、周りの被害など一切考えもせず、己の意に反する者はその手で捻り潰し、妨げになる物はその足で粉砕し……

まさに魔王とは、かく有り！　といったお方である。

あの方を注意できる者など……一人居るには居るが、それもほぼ無視されて終わっているからな。あれはノーカウントだ。

皆その強大な魔力に平伏し、頭を下げる事しかできぬ。

そんな魔王様の番となるなど、高位の魔族でも耐えられまい。

それなのに、人間の娘など……どんな酷い結果になるか想像もつ

かぬ！

あぁ、あの時もっと出来る事があったのではないかと、やりきれない気持ちでいっぱいだ。

突然の出来事に理解が追いつかず、魔王様の膝に乗せられた戦姫をただぽかんと見ている事しかできなかった自分が情けない。

何も知らず、あの娘が魔王様の差し出した果実を口にした時、我は心臓が凍結した様な気分を味わった。

そして平和の為にと、戦姫が、自らを差し出……っ、すまぬ、思い出して泣けてきた。

いや、あの判断は正しい。もし戦姫が拒否していたらならば、気分を害した魔王様によってあの日のうちに人間界は壊滅していただろう。

あの方ならそれくらいする。我は断言できる。

自分一人が犠牲になる事で、他の何万人が救われるなら……あの娘は、そう考えたのだろう。苦渋の決断だったに違いない。

婚礼の儀では、きっと辛いのだろうに、気丈に微笑んで見せる戦姫の健気な……ぅっ、すまぬ、また涙が。あれはもう、見ていられなかった。

しかも、戦姫を助けるために乱入した王と、魔王様の間に入り、その争いを止めるために、あんな嘘まで。あんな、泣きそうな顔で、詰まりながら、搾り出すようにして発せられたそれを本心だなどと思えるか？

あぁ、せめて一言、嫌だと言ってくれたのなら、我に、助けを求めてくれたのなら……

いや、そうではない。口にせずとも分かっているではないか。黙ってあの娘が不幸な最後を遂げるのを見ていて良いのか！？　否だ！

我は拳を握り締め、この命を賭して戦姫を救い出そうと決意した。

魔方陣を展開しようと見上げ、目を丸くした。空にはすでに、幾つもの魔方陣が重なり合いながら展開している。

周りを見れば、同じように決意の篭った顔をした同胞たちと目が

合った。
あぁ、お前等も同じ気持ちなのだな！　我等は力強く頷き、固く手を握り合った。
我等の手で魔王様を止めるのだっ！

11（※挿絵有）

つぃっと魔王が指を動かすと、魔族達は見えない何かによって一斉に宙吊りにされた。

何十人もの魔族が、首根っこを掴まれた様な格好でだらーんと吊る下がっている様子は、かなり不気味だ。

「少々、これ等を躾けて来る。」

そう言い残し、宙吊りにしたままの魔族達を引き連れて颯爽と部屋を出ていく魔王。大きく開け放たれていた扉が音も無く閉まった。

と思ったら、すぐに開き、魔王が足早に戻ってきた。

「これを……今のうちに渡しておく。うっかり壊してしまったら、用意した意味が無いからな。」

そう言いながら、やや照れくさそうに懐からソレを取り出す魔王。

「着けておけ。」

「これを、ですか？」

私はやや困惑しつつ、差し出された首輪（ソレ）を受け取った。そう首輪。革製の、く・び・わ、である。

「首輪とは、所有の印なのだろう？」

魔王は何だかとても得意げだ。

「……はい。」

笑いを噛殺し切れず、声が震えてしまった。

駄目だ、笑っちゃ駄目だ。本人は真面目なんだから。いや、真面目に言っているのが分かるからこそ……ぷくくっ！

何だその偏りすぎた知識！　いや、ある意味魔王らしい贈り物ではあるけれども。

貰ったからには使うべきかと、震える手でどうにか首輪を着けて見せれば、

「良く似合っている。」

うんうんと満足げに頷き、嬉しそうに顔を緩ませる魔王。あぁ、

もう、可愛いなぁこの人。
首輪が似合うって、それ、褒め言葉としては間違ってるけどね。
まぁ良いや。私の為に、贈り物を選んでくれたって事が、純粋に喜しいから。
「ありがとうございます。」
そっと首元を撫でると、首輪に付いている小さな鈴がチリンと可愛らしく鳴った。
私の手の上に、すっと魔王の手が重ねられ、
「この命果てるまで、俺の心は、お前だけのものだ。」
指先を絡めながら、魔王が囁いた。
その甘い声色に、どきりと心臓が跳ねる。
「この首輪に誓って。」
……一瞬だけ、ツッコミを入れるべきか迷ったのは秘密だ。
向けられた真剣な目と視線を合わせたまま、私は小さく頷いた。
ゆっくりと、二人の距離が近づき……――

――暗転。
多分、ハッピーエンド。
＞ｉ２４５３８―３２３１＜

11（※挿絵有）（後書き）

これにて妄想終了いたします。
ざっくりとした人間が、ふわっとした世界観で、さらっと書いた話なので、
色々ともの足りない感じの出来になっていると思いますが、
ありすぎて「そんなには要らないなぁ」となるよりは、「何か足りないなぁ」くらいの方が良い……と言い訳してみたり。
何にせよ、少しでも楽しんでいただけたなら幸いです。
読んでいただき、ありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1891t/

そのココロは、

2011年5月26日16時58分発行